

「plus α」 ～ソウル支社のご紹介～

CM&EO 事業部 田村 一雄

はじめに

本号から読者の皆様の息抜きのために、私が駄文を掲載させていただくことになりました。Yano E plus は経済研究所の定期刊行物でありますから、硬い内容になるとご推測なさるかもしれませんが、それでは息抜きにならないでしょうから硬軟織り交ぜて書いていきたいと思い、コラムタイトルを「plus α」といたしました。また、同誌は高校生以下の読者はほとんど想定できないので、時にはやや桃色系の文章もでてくるかもしれません。どうぞよろしく願いいたします。

今回は初回ということもあり、弊社のソウル支社についてご紹介させていただきたいと思います。

弊社が韓国ソウルに支社を開設したのは意外と古い。私が入社した1989年には既に存在していたように思う。支社開設の目的は、会員制ライブラリーであるYDB（ヤノ・データ・バンク）事業をソウルで展開しようということであったらしい。弊社役員の個人的知り合いによる個人事務所のような形で同支社はひっそりと事業を継続してきたが、1998年前後の2年間位は主に印刷拠点として機能した。

当時、私は化学・素材事業部（現 CM&EO 事業部：Chemicals, Materials & Electronics, Optics）に所属し、高機能フィルムを中心とした市場調査活動を行っていた。90年代末頃よりLCD分野が爆発的な拡大を見せ始め、このカテゴリで使用される偏光板、TACフィルム、PVAフィルムなど日本勢が圧倒的なシェアを誇っていた。一方、韓国・台湾でも2000年以降偏光板メーカーが立ち上がり始め、2003年頃より頻繁に韓国・台湾を訪れるようになった。ソウル支社には、取材のためのアポ取り、アテンド、通訳などをお願いした。

2006年秋より私がソウル支社長を兼務することになった。我々の事業部が扱う分野は韓国、台湾が世界を凌駕しつつあり、CM&EO事業部とソウル支社を一括して戦略を構築した方が効率的であると判断されたためである。同様な理由で2007年には台北に事務所を発足させた。

ソウル支社は、金浦空港から車で1時間以内の日本大使館やアメリカ大使館近くのチョンノク（鐘路区）にある。有名なチョンゲチョン（清溪川）やインサドン（仁寺洞）も近い。現在、コアなスタッフは3名。このうちの一人はキム・ドンジンといって小学校から高校を卒業するまで東京で暮らし韓国人学校に通っていた。したがって日本語はへたな日本人よりうまい。ソウル市内の大学で報道関係の勉強をし、卒業後矢野経済に入社した。日本に数年留学したりして、その人間がへたにドラえものことを語ろうとすると「10年以上ドラえもんを見て、初めてドラえものことを語ってよい」などと言っている。最近ソウル支社スタッフも実力が向上し、現地取材などを任せられるようになった。

さて、ソウル支社長でもある私は韓国語が全くできない。韓国料理も苦手である。赤を中心としたカラーリングやビジュアルだけで汗をかいてしまう。このため食べられるものが少ない。ある日、夜の食事で私が口にできるのは韓国焼酎のジンロくらいしかなく、特別に作ってもらったハムエッグと韓国ノリをサカナに飲んだこともある。ジンロを飲み、場所を変えてウィスキーのストレートを一気飲みし、さらにはバクダンに発展することもある。和気藹々と腕を絡めて乾杯をしたりもする。すると次の朝は二日酔いなのでホテルのバイキングもフルーツとコーヒーくらいだ。3泊程度の日程だとこれで3kgは痩せられる。

飲食話のついでにもうひとつ言いたいことがある。韓国のアイスコーヒーはまずい。どこで飲んでもまずいのはなぜだろう。ホットコーヒーはそれなりなのに。某最大手企業の地下の喫茶店や金浦空港の売店、ス●ーバ●クスも然りだ。●ター●ッ●スでは「キャラメルマキアート」はおいしい。でもアイスコーヒーはダメだ。私は、韓国でもいつかおいしいアイスコーヒーにめぐり合えるだろうと思って、どこでもアイスコーヒーを注文する。これまでことごとく失敗であった。ただ、出張の最終日、二日酔いの状態で金浦空港の売店で買って飲むアイスコーヒーはなぜかまずくない。薄〜いアイスコーヒーは二日酔いの体にやさしいのであろうか。

私がソウルに頻繁に出張するようになってから、私の部下達も仕事でソウルを訪れるようになった。彼らは私より韓国語を覚え（単語程度だが）、食事も問題にしていない。

私にはI君という信頼する部下がいる。I君はどこに行っても韓国人に見間違えられる自他ともに許す韓国人 Face をしている。I君が出張で韓国に行き始めた頃から韓国人に韓国語で話しかけられ、最初のうちはそれなりに悩んでいたようだが、最近ではめっきりそのことに慣れた。

ある日、I君はインサドンを探索していた。すると日本人夫婦の観光客がI君に道を尋ねた。I君は日本語で丁寧に道を教えてあげた。日本人観光客は深々とお礼し「助かります、日本語お上手ですね」と言われ、I君は「ありがとうございます」と言って別れたという。

おわりに

と、ここまで書いてきましたがソウル支社の紹介になったでしょうか。韓国での調査の案件があればご相談ください。次回は台北事務所のご紹介をいたします。

執筆者略歴：田村一雄

1989年、(株)矢野経済研究所に入社。以来、化学・素材分野の調査研究に従事し、現在はデバイス領域まで調査領域を拡げ、CM&EO事業部の事業部長としてエレクトロニクス分野の川上から川下領域を統括。知的クラスターへのコンサルティング実績を有するほか、台北事務所所長、ソウル支社長を兼務。